

みんなを笑顔にする“さんぎょう”

二人で飲む約束をしたわけではない。でも、俺の目の前にいるサツキの顔を見ると、中学生のあの頃抱いていた淡い想いがビールの泡のように沸いてきて、二人きりも悪くないなあ…なんて考えてしまっていた。

「いらっしやいませー」

聴こえる度に俺たちを店の入り口に振り向かせていた言葉が、残念ながら期待に届いてしまい、勝手に膨らんでいた淡い想いが泡と消えていった。

「遅いよ〜」

俺とサツキの声がハモった。昔はよくハモったものだ。サツキは、地元の和菓子屋の一人娘。明るくて元気な声は、母親譲りのようだ。

遅れてきたのは、幸太郎。都内の上場企業から市内の企業に転職して2年少し経った。悩み抜いていたあの頃の顔とは打って変わって、羨ましいぐらいの晴れやかな笑顔でやってきた。少し後ろには、“悩みの種”だった可愛い笑顔も見えた。

「福ちゃんも来たんだあ！」

烏龍茶のストローを引っ掛けてグラスを倒しそうになりながら、幸太郎の子どもの福ちゃんにサツキが両手を伸ばして席に招いた。

「まだ落ち着かないの、体調？」

福ちゃんのほっぺの柔らかさを一通り確認し終えたサツキが、俺のとなりに座ってきた幸太郎に質問した。

「もう、3か月に1回の検査だけ。」

「すごーい！大好きなサッカーもたくさんできるね！福ちゃん！」

また、サツキが両手でほっぺの柔らかさを確認した。

「なに飲む？」

福ちゃんの病状に安心しながらもそのほっぺに嫉妬した俺は、無造作に幸太郎にメニューを手渡した。

「じゃあ、生ビールと、リンゴジュースでいいか？福？」

福ちゃんはまだパパのカバンから取り出したお気に入りのゲームに夢中で、小さな声で「うん。」と言っただけだ。ちょうどおしぼりを持ってきた店員のヒコさんが、左手でスマホを器用に使って注文を受けた。生まれつき右手が不自由なヒコさんは、そ

れを補って余りある気遣いと威勢の良さでこの店の名物店員となっている。ヒコさんに会いに訪れるお客さんも少なくない。ヒコさん自身もこの居酒屋の仕事が天職だと前に話してくれた。「天職」という言葉が今の俺には胸につかえる気がしたが、気にしないように話を続けた。

「今日は、奥さんは？」

「かみさん、福の体調が落ち着いた頃からパートに出るようになってさ…。」

幸太郎の答えが終わる前に、サツキが聞き重ねた。

「どんなお仕事？奥さん、英語が得意だったんじゃないっけ？」

「なんと農業。意外だろ？市内の農業法人で働いてるんだ。」

「英語関係ないじゃん。」

俺もリズムの良い会話に乗るように、流れで何も考えずにツッコんでしまった。

「いや。それが、外国人のパートさんも何人かいて、けっこう重宝がられてるみたい。すごい一体感で、特産の吉川ねぎとか小松菜を地元の人に食べてもらうんだって熱い職場らしい。学校給食やこの店にも卸してるんだってさ。でも、今夜、福の面倒を見られなかったのは別の理由。地域の NPO 活動もしてるんだ。外国語を活かした福祉の NPO。なんか俺よりかみさんの方が忙しそうだよ。」

結婚式の披露宴で見た奥さんが、あのキラキラとした笑顔で活躍している姿が目に浮かんだ。隣を見ると同じく笑顔の幸太郎が、さながらテレビの CM のようにビールを飲んでいる。

「福ちゃんが元気なおかげだねー。」

リンゴジュースを飲む福ちゃんのほっぺをまた触ってサツキが言った。ジョッキで濡れたテーブルをおしぼりで拭きながら幸太郎が続ける。

「それもあるけど、やっぱり地元で働けるからできるんだよね。農業のパートも自転車で行ける距離で、なにかあれば駆け付けられるって安心感があるし。NPO だって、通勤時間が 1 時間も有ったらキツイと思うし。」

「じゃあ、幸太郎、お前はまた都内に転職か？」

子どもの病気が理由にせよ、短いながらもキャリアを重ねた上場企業から市内の企業への転職を選択した幸太郎に少し嫌な質問をしてしまったと思っていたら、聞いてくれてありがとうぐらいのテンションで答えが来た。

「全然考えてないよ。この職場に巡り会って本当に良かったと思ってる。」

前職の経験が活かしていること、中小企業だからこそそのアイデアで溢れていること、地域貢献が肌で感じられること。福ちゃんに吉川産米のおにぎりを食べさせながら、カッコよく語った幸太郎が逆に尋ねてきた。

「お前は、どうなの？上手くいってんの？」

サツキが気を利かせて頼んでくれたハイボールと一緒に、避けていた話題が目の前に現れた。

上手くいっていないわけではない。都内の小さなビルの一角に独立して立ち上げたITコンサルタントとwebデザインを請け負う会社は、両手に余る従業員だが安定している。

「それが、聞きたかったのよ。社長さん！」

福ちゃんからゲームを学んでいたサツキが唐突に話に加わった。小さな手に戻ったゲーム機が、息を吹き返したように陽気な音楽を出してその役割を發揮し始めた。

「まあまあかな。」

陽気なゲーム音に乗ることができず、俺自身が気付くほど暗い声だった。

毎日がお客様相手に勘の鋭いサツキに表情を読まれないように、大げさにハイボールを飲んだので、むせて嘔き出した。ゲーム機を守る福ちゃん以外が、おしぼりで掃除を手伝ってくれた。

あのお転婆だったサツキが、こんなに素敵な女性になるなんて…。創業百年を超える和菓子屋を継いだというオーラすらも感じられた。アプリで毎月チェックしている「広報よしかわ」の先月号に掲載されていた、桜の花びらと戯れるように泳ぐなまずをデザインした水菓子には本当に感動した。こっそりふるさと納税で取り寄せてクライアントへの手土産にした。何より、その記事に出ていた見覚えのありすぎる和菓子職人の凛々しい顔に、久し振りに見惚れてしまった。

「なんか独立にチャレンジしてた頃より浮かない表情だね。」

濡れたおしぼりをまとめながら、サツキが話を再開した。

「そりゃあ、そうさ。従業員もいるんだ。やりたいことばかりできるわけじゃないさ！」

今度は、少し大きな声になってしまったのに自分で驚いた。迷惑をかけていたのも忘れ、俺が理想とする“シャチョウ”としては感情的な言葉が出たのが、アルコールのせいとか鋭く痛いところをサツキに見透かされたせいかは分からなかった。

「幸太郎の会社の『地域貢献』なんかどうせお付き合いだろ。役所との馴れ合いじゃないか。会社は利潤を追求しないといけないんだ。地域貢献で従業員の給料上げられないだろ！」

福ちゃんに聴かれたくない話だ。にもかかわらず幸太郎は、冷静に答えた。

「俺も前の会社のときはそう思ってたし、それは正論だよ。でも、正論の一つでしかないってことが分かった。ウチの会社の地域貢献の活動は、従業員が上司部下関係なく企画してるんだ。パートさんがリーダーになることだってある。それで、職場にコミュニケーションが生まれ、活気が湧いて、仕事の質が良くなる。さらに目的どおり地域へ貢献できれば、まちにとってもプラスになる。この前なんて、市民まつりのウチの会社のブースがあまりに楽しそうだったからっていう志望動機の新卒採用もあったし、企業経営的に見ても、まちづくり的にもプラス要素が豊富だ。それをウチの社長は知っている。」

論破とはこのことだ。冷静になれない俺は、止まらなかった。

「まちづくりなんて、役所の仕事だろ！」

「まちは、みんなで作るんだよね。子どもから大人まで、企業だって、そのまちに関わる全員で。全員が幸せを感じられるように…。おじいちゃんが言ってたよ。」

フォローするように話したサツキのおじいちゃんは、たしか市議会議員をやっていたはずだ。幸太郎が頷きながら続けた。

「みんなが幸せになるために、みんなで市内の農業、商業、工業という産業を盛り上げようっていう条例も出来たんだ。」

「どうせ、役所が勝手に作ったんだろ……。」

ハイボールを一口飲みながら、やっと作り出した冷静さと引き換えに俺が発した言葉には、嫌な苦みが十分に含まれていた。そんな言葉にサツキの明るい声が返ってくる。

「それが違うみたい。その条例、市内の会社の社長さんや農家さんとか、銀行や観光やってるまちを知り尽くした人たちと作ったんだって。うちのお父さんも商工会経由で意見聴かれてたもん。」

その後の会話はあんまり覚えていない。口喧嘩とそれを沸騰させないように3人それぞれが水を差す懐かしい思い出話が繰り返された。とりあえず安心したのは途中か

ら、福ちゃんが疲れて眠ったことだ。俺のカッコワルすぎる言葉たちを聴いて、カッコイイはずの”シャチョウ“という職業が、戦隊モノの悪役に思われたりしていないか心配だった。

会計を済ませて駅に向かう途中、サツキが「もう持てない」と言いながら抱っこしていた福ちゃんを俺に渡してきた。いつかこうやって二人の子どもを…なんてありもしない妄想に頭を使いすぎたのか、滑り落ちそうになった福ちゃんが起きてしまった。

「ケンカ終わったの？」

空き容量が無限の真っ白なメモリーにカッコワルい“シャチョウ”の情報が少なからず保存されてしまっていたようだ。次は、一緒にサッカーでもするしかない。

そんな心配を他所に、眠い目をこすりながら福ちゃんが話してくれた。

「この前、保育所でもケンカになってさ…」

聞けば、保育所に途中から入ってきた子が外国人の子で、日本語がほとんど分からなかった。それでも、一緒に遊ぼうとしていた友達全員がそれぞれにいろいろ言うので、その子が泣き出したそうだ。誰のせいで泣いたんだとかでみんなでケンカになってしまった。お迎え前の時間で先生も保護者も加わり大騒動。

「それで、どうなったの？」

サツキが代表して尋ねた。

「僕、大きな声で言ったんだ！」

「なんて？」

3人でハモった。

慣れない抱っこだからちゃんと掴まっけて欲しいのに、福ちゃんは漫画に出てくる海賊船の船長のように右手の拳を振り上げた。

「みんなが笑って遊べる方法を、みんなで考えよう！って」